

第6章

インドにおける現代のヒンドゥー・ナショナリズム

と民主主義 — 研究レビュー

近藤則夫

— 要約 —

インドでは1980年代以降、コミユナル暴動の頻発化、ヒンドゥー・ナショナリズムの昂揚がみられ、民族奉仕団やインド人民党といった、いわゆるサング・パリヴァールの活動が目立ってきた。本稿では近年のヒンドゥー・ナショナリズム研究の主なものを筆者の視点から整理し、ヒンドゥー・ナショナリズムの現状を把握し、研究、特にインドの民主主義におけるヒンドゥー・ナショナリズムの位置づけに関する研究において何が問題となっているのか把握しようとするものである。研究状況の検討の結果、歴史、政治史、現代政党政治などにおいては、ヒンドゥー・ナショナリズムの研究は実績を上げており、例えば1980年代以降の会議派システムの衰退による政治的隙間の拡大がヒンドゥー・コミユナリズムやヒンドゥー・ナショナリズムの昂揚の大きな要因であったことなどを明らかにしている、と言えるであろう。しかし、その社会との関わり、例えば、社会各階層のヒンドゥー・ナショナリズムへの反応などに関してはまだまだ不十分であるし、社会の他の運動、例えば「その他後進階級」の運動などとの関連も分析は不十分である。ただ社会との関わり合いでヒンドゥー・コミユナリズムや

ヒンドゥー・ナショナリズムが最も先鋭に現出するコミユナル暴動に関しては、その重要性の故に、重要な研究が多く存在する。最後にこれまでの研究をふまえてヒンドゥー・ナショナリズムの今後の展開には、それが「全てを包括」しようとする運動であるかぎり、言説レベルでの限界、そして、コミユナル暴動の限界という 2 つの大きな限界が存在し、少なくとも「全てを包括」することは不可能との暫定的結論を提示した。

キーワード: コミュナリズム、アヨーディヤー、サング・パリヴァール、セ
キュラリズム、コミユナル暴動

— 目次 —

はじめに

第1節 インドにおけるコミュニナリズムとナショナリズム

第2節 ヒンドゥー・ナショナリズムの展開と現代史

第3節 インド社会とヒンドゥー・ナショナリズム

第4節 ヒンドゥー・ナショナリズムの展開とコミュニナル暴動

おわりにかえて

[参考文献]

はじめに

インドの近現代史においては異なる宗教の対立、暴力が折りにつけて歴史の展開に大きな影響を与えてきたとあってよい。1947年のインドとパキスタンの分離独立=「ネーション」の形成はヒンドゥー対ムスリムの宗教的アイデンティティが大きな要因となって帰結した出来事であった。そのような宗教をベースとする「ナショナル」なアイデンティティが自然に存在していたか、または、作られたものであったかの議論は別にして、「宗教」が政治において大きな影響を与えてきたことは認めなければならない。インドでは、宗教などをベースとしてあるコミュニティが他のコミュニティとの比較で自己のコミュニティの優位性、特別性を主張する考え方、イデオロギーは一般に、「コミュニズム」(communalism)と呼ばれる。それは一般に「宗派主義」などの訳が当てられるが、多数派であるヒンドゥー教徒と、その他のインド国内の少数派宗教、とりわけムスリムの間で対立が起こる場合に用いられ、南アジアの歴史的コンテクストでは否定的な意味合いをもつ。

コミュニズムは宗教的、社会的次元の問題であると同時に、それが、権力や暴力に関係する場合必然的に政治問題となる。コミュニズムは、選挙における政党のアピール、コミュニズム団体によるコミユナルな価値観の宣伝、教育、とりわけ歴史教育におけるヒンドゥーやムスリムの取り上げ方など、様々な発現の形態があるが、しかし、政治社会に最も大きな衝撃を与えるのは大規模な宗派間の暴力、すなわちコミユナル暴動が起こる場合であろう。例えば、インドの独立後の構想を練る国民会議派(Indian National Congress: 会議派)とムスリム連盟間の交渉の過程でヒンドゥーとムスリムの間の大暴動、殺し合いが分離へ向かう政治的決断を決定的に後押ししたことからもわかるように¹、大規模なコミユナル暴動は宗派間の社会的亀裂を鮮明にし、政治の展開をしばしば決定づける。それゆえに、分離独立時の大規模

な暴力の記憶が生々しい会議派ネルー政権期(1947～64年)においては、コミユナリズムへ向かう方向性は厳しくチェックされていた²。しかし、コミユナル暴動は1980年代以降頻度、規模とも増大傾向にあり、社会的亀裂を拡大しつつ多数派のコミユナルな感情、考え方に大きな影響を与えてきた。コミユナルなものと同様、大きなうねりをともないつつヒンドゥー・ナショナリズムは拡散してきたといえる。ヒンドゥー・ナショナリズムの分析は現代インド政治分析の重要なポイントである。

本稿では、ヒンドゥー・ナショナリズムに関する過去の主要な研究を振り返りつつ、ヒンドゥー・ナショナリズム研究の位置づけを行いたい。

第1節 インドにおけるコミユナリズムとナショナリズム

本題に入る前に、まず「コミユナリズム」と「ナショナリズム」の関係に触れる必要がある。しかしこれはそれほど容易な作業ではない。本稿ではこれらの概念の比較検討を行うものではないので、ここでは本稿との関連で必要になるとと思われる主要点を述べるにとどめたい。

ゲルナー、アンダーソン、スミスなどの研究者の最大公約数的考え方に従えば、「ナショナリズム」は近代化の過程で、文化共同体と政治共同体の境界を一致させ「ネーション」を成立させるところの運動である(ゲルナー[2000(1983): 1])。このような意味でのナショナリズムは近代以前には存在していないといわれるが、その場合でもスミス [1998(1991)]のいう特有の歴史的過去や神話を起源としてネーションに成長する核となる「エスニー」が存在したことは認められて良いであろう。ナショナリズムが成功するためには、その内に抱える複数のエスニー、様々な社会階層の統合を進める必要があり、そのため人工的な共同体意識を成員全てに持たせる必要がある。その側面を強調すれば成功したナショナリズムが作り出すネーションは「想像の共同体」(アンダーソン [1987(1983)])である。以上のようなネーションを生み出すナショナリズムの大きな特徴はその領域内のエスニーや社会階層を飲み込み、同

質化し、それを文化と政治の一致した枠組みに統合しようとする動きにあるといえよう。

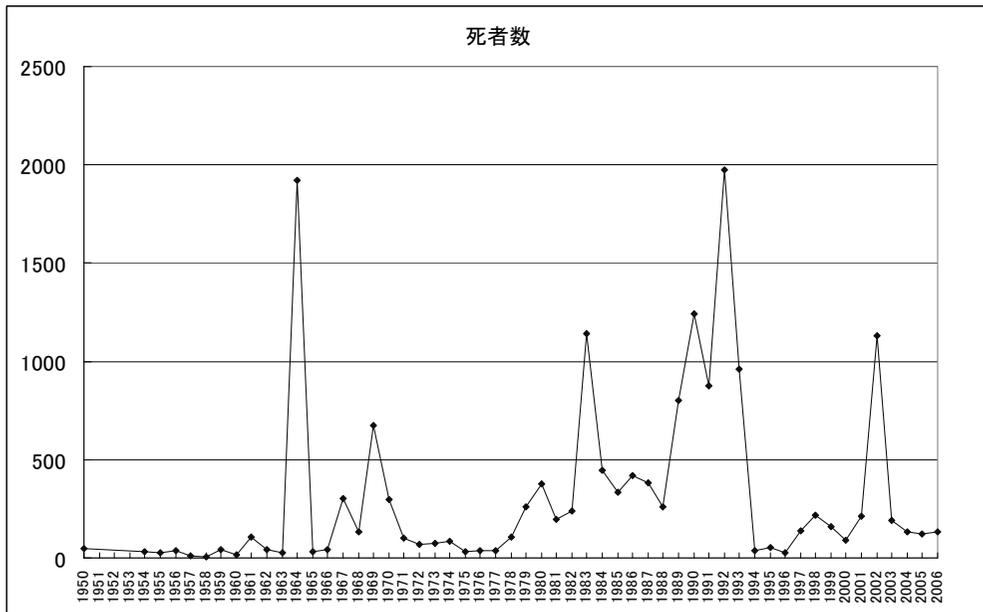
これに対して南アジアの「コミュニズム」の場合は想定される「コミュニティ」の定義に合わない集団を差別化し、排除しようとするということが大きな特徴と思われる。例えばヒन्दゥー・コミュニズムからすると排除されるべきはムスリムやキリスト教徒である。この点においては「ナショナリズム」とは一応「部分的」には区別可能であろう。しかし、コミュニズムは一方ではコミュニティ内の様々な細かい亀裂、例えばインドの文脈で言えばカーストなど、の解消とコミュニティの統合強化ということも一面では含んでいる。従って「コミュニティ」をどう定義するかによって「ナショナリズム」に近い物にもなりうる。また「ナショナリズム」がしばしば戦争によって成長してきたことからわかるように「ナショナリズム」も排外性、外部への攻撃性を持つ点を考えるならば両概念の差異はさらにぼやける。

このような両者の関係の微妙さは単に概念の整理で問題となるだけではなく、インドの現実の政治においても重要な問題となる。ヒन्दゥー多数派の価値観や社会制度にそって国家を作ろうとする運動を「ヒन्दゥー・コミュニズム」とすべきか「ヒन्दゥー・ナショナリズム」とすべきか、当てはめる「ラベル」によって現実の政治においても運動の評価に大きな違いを生む。本稿では排外性、敵の排除を強調する場合に「コミュニズム」を、包括的統合的な「ネーション」を作ろうとするものである場合「ナショナリズム」という概念を当てることとするが、両者は極めて密接に重なり合っており、どちらを当てはめるのが適当なのか、多くの場合微妙なものとなる。

以上のように「コミュニズム」も「ナショナリズム」も力点の置き方には違いがあるが、運動としては、共同体内部の統合強化、異物の排除という性格を持つといえよう。両概念とも現代インド政治で大きな問題となるのは、人口の約8割をしめる多数派ヒन्दゥーの場合である。なぜなら、民主主義体制で、もし「多数派の専制」(Beahm [2002])が成立するとそれは少数派にとっては逃れられないものになりうるからである。そのような負の側面を強調

するために「コミュニズム」概念をここで使うとすると、少数派にとって「逃れられない」状況はコミユナル暴動においてはっきりとする。独立以降のコミユナル暴動では死傷者の多くが宗教的少数派と言われる。例えば独立後の最大規模のコミユナル暴動は1992年12月にウッタル・プラデーシュ州アヨーディヤーのバーブル・モスクをヒन्दゥー・コミユナリズム勢力が破壊した事件に続く暴動で、北インドや西インドを中心に多数の死者をだしたが、この時も死傷者の多数はムスリムであった。状況は2002年2月のグジャラート州ゴードラの列車火災事件をきっかけとして広がったコミユナル暴動でも同じであった。図1のように、1980年代後半以降の政治、社会におけるヒन्दゥー・コミユナリズムの影響力の伸張、特にコミユナル暴動は社会的亀裂を決定的なものにし、例えばグジャラートなどではムスリムなど少数派に逃げ場のない閉塞状況をつくりだしている。

図1 ヒन्दゥーとムスリムのコミユナル暴動による死傷者



(出所) 1995, 1996, 1997, 2000 については Engineer [2004: 224]が新聞報道からまとめたもの。その他は基本的に Ministry of Home Affairs のデータであるが、以下の資料から採録した。Engineer [2004: 223-224], Rajya Sabha [2000], Lok Sabha [2004], Lok Sabha [2005], Ministry of Home Affairs (Govt. of India) [2007: 37]

(注) 研究者の間では政府資料の基準のとりかた、正確性に疑問を投げかけるものも多い。しかし例えば、Wilkinson (ed.) [2005: Appendix]などの新聞報道に基づく集計をみても、大まかなトレンドは似通っているといつてよい。

次節でヒンドゥー・ナショナリズム研究の具体的検討に入る前にその起源を抑えておきたい。政治思想運動としてのそれは決して「自然」に発生したものではなく、それはインド特有の政治社会環境の中でヒンドゥーの団結強化をめざす政治運動として開始されたものであることを確認するためである。

現代のヒンドゥー・ナショナリズム運動に直接的につながる起源は、1925年にできた「民族奉仕団」(Rashtriya Swayamsevak Sangh: RSS)である。RSSはヒンドゥー社会の改革運動の中から生まれた団体であるが、分離独立につながる暴力と混乱のなかで勢力を伸ばしていく。また「大衆連盟」(Jan Sangh: JS)はその政治的ウィングとして1951年に設立された政党である。同党は1977年に一旦その他の反会議派の政党とジャナター党(“Janata Party”: 「人民党」の意味)に融合したが、ジャナター党の内紛から1980年に分離し、現在の「インド人民党」(Bharatiya Janata Party: BJP)となっている。彼らの説くものの中核には「ヒンドゥトゥヴァ」(Hindutva)³という思想があることは言うまでもないが、それは、直接的には「ヒンドゥー大連合」(Hindu Mahasabha)のサヴァルカル総裁が1923年に説いた概念(Savarkar [1989(1923)])に基づくものである。それによると、ヒンドゥトゥヴァは分裂して弱体化したヒンドゥーを糾合する単純なイデオロギーではなく、「ヒンドゥー性」であり、ナショナルで文化的なものである。それはインドを「母なる地」とする地理的概念でもあり、「共通の血」と文化的伝統を過去から受け継ぐものであるとされる。

ヒンドゥー社会の改革運動からこのようなイデオロギーが生まれ出たのは、西洋の文化的優位性によって苛まれる植民地下のヒンドゥー社会、それも特に、高カースト・ヒンドゥーの挫折感やその裏返しとしての虚勢という心性がある。そのような特定の背景から生まれたとはいえ、しかし、ヒンドゥトゥヴァは、ヒンドゥーがネーションを形成するという「神話」に基づいていることは明らかであり、スミスがいうような「ナショナル・アイデンティティ」を形成するものとして、「ナショナリズム」につながる有力な核と考え

てもよいであろう。しかし、それは 1970 年代まではあくまで「核」であった。それが、急速に拡散するのは 1980 年代後半以降であった。このような点を考えるためにまず、現代史におけるヒンドゥー・ナショナリズムを考えてみる必要がある。

第 2 節 ヒンドゥー・ナショナリズムの展開と現代史

ヒンドゥー・コミュニズムまたはナショナリズムに関する研究はその重要性の故に膨大な数に上るが、近年再び盛んになったのは、1980 年代以降の運動やそれに伴うコミユナルな対立、暴力の頻発、そして 1992 年のアヨーディヤのモスク破壊事件と大コミユナル暴動、といった一連の事件以降であろうと思われる。

近年におけるヒンドゥー・ナショナリズム研究で先駆的なものは、Andersen and Damle [1987]で RSS や JS/BJP などヒンドゥーの歴史的改革運動の中から、サング・パリヴァールの歴史的展開、組織形態、思想などを詳しく描き出している。また Panikkar (ed.) [1991]の論文集はコミュニズムの様々な位相、すなわち、独立後におけるコミュニズムの形成の特色、その復古主義としての側面、「多数派主義」的傾向、コミユナル暴動の役割、「その他後進階級」(Other Backward Castes: OBCs)⁴への優遇策への対抗策として BJP が打ち出したという側面、などを検討している。同じく、Basu et al. [1993]も先駆的なものと評価できる。これは 1992 年 12 月のアヨーディヤ事件の後に出版されたもので、事件に至るヒンドゥー・ナショナリズムの歴史的展開をコンパクトにまとめたものである。

興味深いのは以上の著者たちは運動を明確に「ヒンドゥー・ナショナリズム」とは位置づけていないことである。「ヒンドゥー・ナショナリズム」という概念は使われるがそれは RSS や JS/BJP 勢力自体の主張の説明の場合などである。多くの場合適用されるのは「コミュニズム」という概念である。1990 年代半ば以降、研究者の多くは次第に「ヒンドゥー・ナショナリスト」

あるいは「ヒンドゥー・ナショナリズム」という概念を当てはめるようになるのであるが、この頃までは特殊で、また、どれだけの広がりを持つか不明であった運動を果たして「ネーション」を形成するものとして正統に評価していかどうか、定まらない面があったのではないかと思われる。しかし研究者の見方はすぐに「ナショナリズム」へとシフトしていく。

Malik and Singh [1994]はヒンドウトゥヴァを近代における多数派ヒンドゥーのナショナリズムと明確に特徴づけた。彼らは「ヒンドゥー・ナショナリズム」の実現を目指す JS/BJP の展開を詳しく分析し、JS/BJP がヒンドゥー・ナショナリズムを広める、いわば前衛政党としての急進的なあり方と、それに対して現実の政党政治の中で政権を獲得するために政治的妥協を繰り返さざるを得ないあり方の間で揺れ動く様を分析した。

日本においては歴史学の小谷 [1993]がいち早くアヨーディヤー問題の歴史的展開を分析し、ヒンドゥー・ナショナリズム勢力の主張の不合理性を指摘する一方で、イスラム勢力によるヒンドゥーの聖地や寺院の破壊という歴史に対して「時効はあるのか」という問いを提起することで、複雑にからみあった問題の歴史的構造を描き出している。また、内藤 [1998]はヒンドゥー・ナショナリズムを推進する最大の勢力である、いわゆる「サング・パリヴァール(Sangh Parivar)」⁵、すなわち、ヒンドゥーを社会的、文化的に統合することを目標として 1964 年に設立された「世界ヒンドゥー協会」(Vishva Hindu Parishad: VHP)、その青年行動部隊である 1984 年に設立された「バジュラング・ダル」(Bajrang Dal: BD、「ハヌマーンの軍団」の意味)など多くの組織があるが、RSS を中心とする「家族」といわれる諸組織の現代史的展開を丹念かつ批判的に説明した。また、長崎 [1994]はセキュラリズムを掲げ独立運動を率いた会議派が基層文化としてのインド民衆を代表するがゆえにヒンドゥー・ナショナリズムをその内部に持たざるを得ず、いうなれば、セキュラリズム＝世俗主義を「顕教」として、ヒンドゥー・ナショナリズムを「密教」として不即不離の関係を内包せざるを得なかった会議派の歴史的展開を分析した。

長崎は別の著作(長崎 [2004: 132-133])で、外敵からの歴史的被害者意識をいなくヒンドゥー・ナショナリズムが守ろうとする文化領域と、政治の領域との間のギャップが存在することが、時には暴力に頼ろうとするようなヒンドゥー・ナショナリズムのエネルギー源となっているとする理解を示した。長崎のこれらの考え方は、ゲルナーの「ナショナリズムを政治的な単位と文化的な単位が一致しなければならないという政治的原理」として「ナショナリズム」を定義する考え方とほぼ一致するように思われる。そのような考え方が正しいとすれば「ヒンドゥー・ナショナリズム」は特殊インド的現象としてその内容物は異なるが、その形式とダイナミズムは他の多くの国の「ナショナリズム」と共通する一般的な現象とも理解できるであろう。

以上の研究は歴史学的視点が強いが、現代政治により重点を置き RSS と JS/BJP の政治を研究したものとして最も包括的な研究は Ghosh [1999]であろう。同氏の研究の特徴はその包括性で、RSS と JS/BJP の成長から 1998 年に中央で連合政権を樹立するまでの過程をバランスのとれた形で説明している。特に JS/BJP とその母胎である RSS の関係や両者の政策の詳細な比較は有益な整理である。表 1 がそのまとめである。同氏の研究は 1998 年までであるのでそれ以降の政治展開、とりわけ、1999 年から 5 年間 BJP が国民民主連合 (National Democratic Alliance: NDA) 政権を担当したことによる政策の変化は入っていない⁶。それが目立つのは経済政策の部分で、表では「スワデーシ(経済自立)」である。表では BJP は「ハイテク、中核分野での外国投資を進める」と、自由化の分野を限定しているが、しかし 1999 年以降の政権担当期においては 1991 年以降の経済自由化の流れをほぼ受け継いでいると言って良いであろう。「スワデーシ」を掲げるものの本来 JS/BJP の経済政策は抽象的傾向が強く、そのため、政権担当になった時もあまり「過去にとらわれず」にプラグマティックな対応ができたといえる。表のその他の部分については現在に至るまでほぼ同じと考えてよい。

表 1 BJP と RSS の争点

争点	BJP	RSS
スワデーシ(経済自立)	ハイテク、中核分野での外国投資を進める。	グローバルイゼーションに反対。外国投資はインドの文化を破壊する。
ジャンムー・カシュミール州の特別な地位を定めた憲法 370 条の扱い。	廃棄する。	廃棄する。
核兵器	核武装する。	明確でない。
ムスリムの礼拝場などのヒンドゥー寺院への転換。	Kashi および Mathura のモスクのヒンドゥー寺院への転換はしない。	ムスリムが Kashi および Mathura のモスクをあきらめないのであれば、モスクを解放する必要あり。
雌牛の屠殺の禁止。	同意はするがトップの優先順位ではない。	すぐの実施すべし。
統一民法典の設立。	同意はするが、国民のコンセンサスが必要。	すぐの実施すべし。
ヒンディー語の地位。	育成はするが、非ヒンディー語地域に押しつけはしない。	ヒンディー語を国語と宣言すべし。
ヒンドウトゥヴァ	力の入れ方が弱まる。極端な愛国主義者というラベルは望んでいない。	明確に推進。
文化	多面的な視点が徐々に強まっている。ヒンドゥー主義者によるリベラルなムスリム画家フセインへの攻撃を非難。	文化侵略に反対。ヒンドゥー主義者によるリベラルなムスリム画家、フセインへの攻撃を是認。
社会	「その他後進階級」(OBCs)への留保制度を勧告したマンダル委員会を尊重する。国会での女性への留保制度を支持。	「カースト」制度には反対。女性への留保制度は男女間の軋轢を生じせしめると考える。

(出所) Ghosh [1999, p. 377]

日本においては政治学的分析として広瀬 [1994]、堀本 [1996]、木村 [1996: 第 4 章]、近藤則夫 [1998]、近藤光博 [1998]などがあるが、これらは大体において、会議派を中心とするそれまでの政党システムの行き詰まりをヒンドゥー・ナショナリズムの政治的展開の前提としてとらえ、現代史的に特有の条件の下で成長してきたヒンドゥー・ナショナリズムの中核をなす RSS や JS/BJP などがいかにして時々の状況に適応し影響力を拡大したか、その様相を分析したものである。日本においても 1992 年のアヨーディヤー事件や RSS や BJP などのヒンドゥー・ナショナリズム勢力の影響力伸張を契機として歴史学や政治学で研究が活性化されてきたが、2000 年までの日本の研究状況自体を批判的に検討したものとして佐藤 [2000]がある。佐藤は日本におけるヒ

ンドゥー・ナショナリズム論、あるいはコミュニズム論の研究を批判的に検討し、そこにおいて何がたりないのか論じた。佐藤によるとインド政治の分析においては、1990年代までに会議派の変質が起こり、同時にそれと平行して従来のインド政治の理念である「社会主義」、「セキュラリズム」、「民主主義」といったそれまで正統的とされたイデオロギーが溶解または変質したことが、コミュニズムの昂揚の重要な要因である。このような認識が少なくとも明示的に十分に考慮されていないことが、政治運動としてのヒンドゥー・ナショナリズムの理解を不十分なものにしてしているとした。

一方、サング・パリヴァールの歴史展開と政治を JS/BJP や RSS を焦点として分析したものの中で、思想史、運動史、政治分析として最も洗練され、包括的なのはおそらく Jaffrelot [1996]であろう。

Jaffrelot は 1920 年代からのヒンドゥー・ナショナリストの運動の起源は「脅威を与える他者」、すなわちキリスト教徒やムスリムなどから、ヒンドゥー社会を防衛するためにヒンドゥーの団結と強化を目指すところにあったとする。1925 年に結成された RSS がそのような運動の中心的団体となるが、Jaffrelot によると、彼らは 3 つの戦略を採ったという。一つはヒンドゥー自らの脆弱性の裏返しとしてそれを拭うために他者に汚名を着せ、それに対抗しようとするによりヒンドゥーのイデオロギー的アイデンティティを形成するという戦略、2 つめはエスニシティと宗教を道具とする動員、3 つめが各地の特殊性に応じてヒンドゥー・ナショナリズムを移植することである。RSS と JS/BJP によるこれらの戦略は 1950 年代ぐらいにはほぼ形成された。Jaffrelot によるとヒンドゥー・ナショナリズムを強化する以上のような戦略を追求する上で JS/BJP においては、人々と接触する活動家レベルでは運動の急進性、純粋性を追求しようとしたのに対して、指導層部は選挙政治の現実から政治の「主流」に融合し妥協する傾向が強く、そこにおいて矛盾が、党の上・下および党と RSS との間に生じたとされる。そのような矛盾を抱えるがゆえに 3 つの戦略の発露は政治状況に応じてある時には急進的に、ある時は穏健に推移するという。

先にも述べたように 1960 年代までのネルー時代にはコミュニズムがチェックされていたため戦略の自由度は限られていたが、1960 年代後半以降の会議派のあいつぐ経済社会政策の失敗と社会経済危機から会議派の影響力が揺らぐと、ヒンドゥー・ナショナリズム勢力が成長する余地が生まれてくる。それは一つには会議派自身、特に、州レベルの会議派はもともとヒンドゥー・ナショナリズム的要素が内包されており、その政治的基盤が揺らぐとともに 1980 年代以降、会議派自らがヒンドゥー大衆にすり寄る傾向が現れてきたことによる。また会議派の変質に加えて、OBCs の運動などによって社会が大きく揺らいだこともヒンドゥー・ナショナリズム勢力が勢力を伸張する機会を与えた、という。

以上の説明の後半部分、すなわち会議派の政党政治の動揺⁷やその他の社会変動がヒンドゥー・ナショナリズムが伸張する「隙間」を用意したという点は日本の研究者も含めほとんどの研究者に一般に認められていると言って良い。急進化と穏健化の間で揺れ動く様も先の Andersen and Damle [1987]、Malik and Singh [1994]、Ghosh [1999]など多くの論者に指摘されており、Jaffrelot 独自の貢献という訳ではないが、Jaffrelot の分析が最も精緻なものであると思われる。いずれにせよ、このような理論を敷衍すれば、BJP や関連するヒンドゥー・ナショナリズム勢力はそのような「隙間」を利用して、1980 年代後半から 1992 年 12 月のアヨーディヤー事件にいたる時期は急進化、1990 年代後半以降、政権につく可能性が現実的になった時は協調および穏健化、というように戦略を使い分けることによってその影響力を伸張させたと理解できる。これに加えて、これらの論者の一つの有益な指摘は、おそらく、政党政治レベルで BJP などヒンドゥー・ナショナリズム勢力がどんなに穏健化したように見えても、その内部または下位の運動員レベルでは過激な急進主義を抱え込んでいることを示している点であろう。

例えば、2002 年 2 月にグジャラート州ゴードラ事件をきっかけとして広がったコミューナル暴動は中央政府も州政府も BJP の政権下であったにも関わらず起こった事件であった。ゴードラ事件を契機とする暴動は、“pogrom”(組織

的・計画的な虐殺)、“carnage”(大虐殺)とも形容される事件であったが、それは州政府の黙認の下にヒンドゥー・ナショナリスト勢力に扇動されたヒンドゥーによるムスリムへの攻撃であったといえる。政党政治レベルの力学からは政権について BJP は「おとなしくなる」はずであるが、しかし、この事件は単純にそうはならないことを示している。そうはならなかった最大の要因はコミュニカル暴動が構造化されているグジャラート州社会、特に都市部、の特殊な事情に加えて、州のヒンドゥー・ナショナリズム勢力内部の過激な要素の存在であった。以上の論者の分析はそのような過激な要素が表面的には隠れていても基層社会とのつながりにおいて実は脈々と存在していることを指摘しているといつてよい。

ヒンドゥー・ナショナリズム勢力の「内部」や「下位のレベル」に過激な要素を抱えているということ进行分析するためには、社会との接点を考える必要がある。ヒンドゥー・ナショナリズムの運動が社会変革の運動である以上、RSS や JS/BJP などのイデオロギーや政治展開だけを分析だけではその理解が難しい。ヒンドゥー・ナショナリズムの政治はマヌーバーとしての側面もあるが、当然それだけではなく、社会の状況によって制約を受けている。

例えば BJP 勢力によるアヨーディヤー運動、すなわちアヨーディヤーのバール・モスクの地にラーマ神の寺院を建立しヒンドゥー・ナショナリズムを昂揚しようとする運動は、V.P. シン首相による 1990 年の OBCs の留保制度を中央政府機関へ適用するとした発表への対抗策として加速されたことは有名である⁸。すなわち、ヒンドゥー社会を「OBCs 政治」の場とすることを阻止するためであった。OBCs 政治が一旦確立すると、OBCs と高カーストや低カーストとの対立が固定化されるおそれがあり、カーストを超えてヒンドゥーの統合を目指すヒンドゥー・ナショナリズムが広まる余地が無くなるかもしれない。従って機制を制し、そのような OBCs 政治の方向に進まないようにするために、BJP 勢力は L.M. アドヴァーニのラト・ヤートアー(宗教的山車による示威行進)という形でアヨーディヤー運動を強化した、つまり、社会の状況に制約されての決定であったといえよう。この例では社会にとって

OBCs 政治とヒンドゥー・ナショナリズムがどのように受け入れられるかという理解する必要がある。

また、間欠泉のように吹き出る暴動などコミュニズムやナショナリズムのエネルギー、さらには佐藤の指摘する「セキュラリズム」などの「理念の溶解」などを理解するためにも社会変動の理解が欠かせない。「理念の溶解」はイデオロギーあるいは政治の領域の内側だけで起こったというよりも、都市化の進展とスラムの拡大、中産層の増大、消費文化の浸透といったよりマクロな経済社会変動からじわじわと影響をうける形で進行していったと見るのが適切ではないかと思われる。Jaffrelot の研究においても中産階層の青年層、失業層などにヒンドゥー・ナショナリズムの伸張を重ね合わせる試みはなされているものの、実証研究としてはまったく不十分である。どのような人々が、そして、なぜ運動を受け入れ、それに参加するのか、そしてそこにおいて発生する問題が分析される必要があるであろう。

第3節 インド社会とヒンドゥー・ナショナリズム

不十分ではあるが、ヒンドゥー・ナショナリズム運動と社会の関係の分析に重点をおいたものとして Hansen [1999]があげられるであろう。Hansen は1980年代中頃からの「サフロン・ウェーブ」(サフロン色はヒンドゥーイズムの象徴とされている)の盛り上がりは多数決民主主義によってもたらされたもので、すなわち、ヒンドゥー・ナショナリズムの運動は近代民主主義的なものであり、決して非民主主義的なものではないと説明する。そして選挙などを通じる大衆の政治参加はその内部に様々な作用・反作用を生み出すが、とりわけ重要なのは教育を受け従来政治で重要な役割を担ってきたヒンドゥー中産階級、その多くは高カーストであるが、彼らと、それに対して、成長しつつある「その他後進階級」や下位カースト、ヒンドゥー社会の周辺に位置づけられる部族民など、従来は下位または受け身的立場にいるものとされた階層との関係である。民主化に伴う後者の政治参加の拡大によって相対的

に立場を狭められることになる前者は、自己の領域を侵害されるという強力な被害者意識、フラストレーションを感じそれが、ヒンドゥー・ナショナリズム勢力に利用される、という。ただしヒンドゥー・ナショナリズム勢力の側は、単一なヒンドゥー文化という長い間に形成されたフィクションによって「ヒンドゥー・ネーション」を作り上げることが目標であるから、ヒンドゥーの間の亀裂を塗り固め、結束させるものが必要となる。それがアヨーディヤーのバブル・モスクの地にラーム神の寺院を建立しようとする運動であった、という。アヨーディヤー運動のプロセスはヒンドゥーにとっては歴史的汚点を拭い、不純物を破壊することを意味し、バブル・モスクは全てのヒンドゥーにとって否定的シンボルとなる。そのような否定的ではあるが、ヒンドゥー内の諸集団すべに共通するシンボルによってヒンドゥーに「コミュニティ・アイデンティティ」を浸透させ団結させるのである。

Hansen は以上のようにヒンドゥー社会における運動の位置づけを描くことによってヒンドゥー・ナショナリズムの昂揚を説明する。そこにおいては都市部の中間層が重要な役割を果たし、従って、都市化、資本主義の発展、さらにはグローバリゼーションなどが背景として重要になる。**Hansen** はヒンドゥー・ナショナリズムおよびイスラム原理主義で表わされるような文化的浄化および社会調和の言説への感受性は、一般的に都市化および資本主義発展という、より大規模なプロセスで可能になった、とも言っている。

以上のような **Hansen** の分析はヒンドゥー都市部中産層という階層に注目してヒンドゥー・ナショナリズムの浸透を説明しようとするものである。しかし「都市部中産層」の重要性を説明するものの、それがヒンドゥー・ナショナリズムにおいて「どの程度」重要であるか、実証的に示しているとは言えない。

拡大するヒンドゥー都市中間層の間でヒンドウトゥヴァが急速に受容され、それがヒンドゥー・ナショナリズム政治の大きなエネルギーとなっているとの説はたびたび議論される。日本においても、この点に関して注目度は高い。近藤光博 [2002]は経済的にも力をつけつつある中間層の自尊心、国民国家観、

近代性、世界秩序観などの文化的心性が「ヒンドウトゥヴァ」と整合的であると論じ、そのような整合性のゆえにヒンドウトゥヴァは彼ら、特に下位中間層の剥奪観や異議申し立て、ルンペン若年層の情念を運動に取り込むことができていると主張する。中間層の文化変容、そしてそれをもたらすところの経済自由化やグローバリゼーションとの関連で問題を分析したものとしては他に文化人類学における関根 [1998]があげられるが、それによるとヒンドゥー・ナショナリズムの台頭は経済自由化およびグローバリゼーションの進展と密接な関係にあるという。また、関根 [2006: 第3章]⁹はタミル・ナドゥ州のチェンナイのフィールド調査を元に、RSS につらなるヒンドゥー・ムンナニという団体が「ヴィナーヤガ(ガネーシャ)・チャトゥルティ」という祭りをヒンドゥーとムスリムを対立させる媒体として利用しようと試み、それによって従来はコミュニカルな対立から比較的は無縁と考えられていた人々の間でコミュニナリズム言説が社会化されていくプロセスを人々の目線から分析している。

この領域で日本の研究として最後に中島 [2005]を取り上げる必要がある。その研究は参与観察によって、RSS の末端組織の支部(Shakha)に集まってくる人々などヒンドウトゥヴァをまさに実践する人々の意識、行動に触れることによって日常レベルのヒンドゥー・ナショナリズムを分析しているところに特色がある。中島によれば、RSS などヒンドゥー・ナショナリズムにとって西欧流の、宗教を公的場からいっさい排除するような問題の解決はヒンドゥーの場合受け入れがたいものである。なぜかといえばヒンドゥーの「ダルマ」(法)は、私的領域に限定されるものではなく、全てを包摂するものであり、それによって「公の正義」となるものであるからである。しかしながら、そのような方向性は現実の政治においては結局のところ宗教的価値を全国民に強要する権力主義的傾向が強いため、他の宗教を抑圧することにならざるを得ない(中島 [2005: 174-175, 352-353])という。中島は「全てを包摂する」運動としてヒンドウトゥヴァが RSS の支部、スラム、あるいは政治集会やデモで拡散していく様相を分析するが、彼が指摘する重要なポイントは運

動のイデオログが説く「ヒンドゥトゥヴァ」と民衆レベルのそれにはかなりのギャップがあるということ、そして、それは民衆が単なる客体ではなく、独自の意志をもつ主体でもあることの現れであるという点であろう。ダリト(被抑圧民)と呼ばれる指定カーストや後進的な指定部族¹⁰など社会の底辺層にも徐々にヒンドゥトゥヴァの影響が浸透していることが近年問題とされるが¹¹、中島の研究は主に都市部での生活レベルで浸透、そして、それに対する反作用を考えると有益な研究となっている。

以上は社会運動という視点からヒンドゥー・ナショナリズムの拡散と社会との関係を実証的に探ったものであるが、依然としてどのような階層がヒンドゥー・ナショナリズムにどのように参加しているのか、全体像が浮かび上がるというにはほど遠い。もっともこれは1個人の研究者に対しては過大要求であるであろう。この問いに答えられるとしたら、それは大規模な意識調査による分析である。選挙時に行われる投票行動調査、世論調査がそれである。この点に関しては別稿の選挙分析(近藤則夫 [2007])で研究状況を示した。ここでは1例としてデリーの発展途上社会研究センター(Centre for the Study of Developing Societies)による2004年の連邦下院選挙時のサーベイを示す。各階層のBJPに対する支持率をヒンドゥー・ナショナリズムに対する支持と近似的に見なすのである。これには異存があるであろうが、注意深く数字の意味を解釈することで、ヒンドゥー・ナショナリズムの「量」に接近できる。インドが選挙制度を民主主義の核として持つ以上、その「量」について理解することは、その政治的インパクトを考える上で重要なポイントとなるからである。

表によるとBJPの支持基盤はやはり高カーストが中心で、反対にムスリムの間ではほとんどない。しかしより注目すべきはOBCs、特にOBCs上位の間でかなりの支持基盤を確保していることである。OBCsの定義には幅広いカーストまたは階層が含まれ総人口に占める割合は高い。このOBCsにおける支持の広まりが1980年代以降のBJPの支持基盤の拡大の大きな要因である。もちろんBJPへの支持はヒンドゥー・ナショナリズムが唯一の要因ではない

から割り引いて考える必要があるが、しかし、かなり大きな部分を占めることは間違いない。このような広範な階層への BJP の影響力の伸張のかなりの部分がヒンドゥー・ナショナリズムのせいであるとすると、2 つの点を改めて検討する必要があるだろう。一つは、多様な階層へのヒンドゥー・ナショナリズムの言説が送り込まれる経路、すなわち、メディアの問題である。もう一つは地域的、階層的多様性への対応の問題である。

表 2 2004 年連邦下院選挙: カースト・コミュニティ別支持政党(%)

カースト・コミュニティ	サンプル数 (比率%)	統一 進歩 連合	会議 会派	会議 の協 力政 党	国民 民主 連合	BJP	BJP の 協 力 政党	左 翼 政党	多 数 社 会 党	社 会 主義 党
高カースト	3552 (15.7)	10.5	12.7	4.7	24.5	30.8	14.6	17.7	3.1	9.4
農民有産階層	1907 (8.5)	8.7	7.5	11.8	11.0	9.6	13.3	4.2	1.7	5.1
OBCs 上位	4516 (20.0)	20.0	17.7	26.0	21.7	19.1	25.7	10.0	12.0	32.0
OBCs 下位	3602 (16.0)	16.0	14.1	20.7	17.3	16.7	18.2	20.0	9.6	12.8
被抑圧階級 (指定カースト)	3632 (16.1)	16.5	17.3	14.5	10.3	8.8	12.6	20.1	67.6	9.7
部族民 (指定部族)	1697 (7.5)	8.8	10.1	5.3	6.9	8.9	3.8	7.5	-	-
ムスリム	2227 (9.9)	14.5	14.0	15.8	3.0	3.1	2.8	8.6	5.9	31.6
シク教徒	559 (2.5)	1.8	2.4	0.2	3.2	2.0	5.1	2.5	2.5	1.5
キリスト教徒	767 (3.4)	5.1	5.1	5.1	2.0	0.9	3.6	4.7	0.7	-
その他	113 (0.5)	0.4	0.4	0.3	0.4	0.4	0.5	1.4	0.3	0.1
計	22567 (100.0)	100	100	100	100	100	100	100	100	100

(出所) Yadav [2004: 5390]. より筆者作成。

(注) ¹⁾ “.1%以下. ²⁾ 元の資料の表は各行の方向に比率を求めているが、ここでは縦方向に比率を求めた。

第 1 点のメディアに関しては新聞などの活字メディアと、1980 年代以降はテレビの役割を考えることが重要である。基本的な疑問は、ヒンドゥー・ナショナリズムの拡散はメディアと関係があるのか、ないのか、という点である。まず新聞などの活字メディアについて考えてみたい。

ヒンドゥー・ナショナリズム、あるいはコミュニナリズムの報道に関しては新聞などの活字メディアは英語メディアと母語メディアの役割の差異を考え

ることが重要である。多くの論者によってヒンディー語新聞など母語メディアは扇動的でコミユナルな感情を刺激するような報道を行う傾向にあると批判されてきた。図 2 は新聞など活字メディアの拡大をしめしたものであるが、ヒンディー語新聞などが 1980 年代以降、急速に増加していることがわかる。長期的なヒンディー語紙の拡大は大衆の経済レベルや教育レベルの上昇、そして、社会の政治化によるメディアへの需要の拡大によるところが大きいと考えられている(Jeffrey [1993])。この図とコミユナル暴動の件数の変動を示した図 1 を比べると、1980 年代以降の顕著な増大と言う点で両者は相関しているように見える。これをもって母語活字メディアの拡大がコミユナル暴動の頻発化、ひいてはヒンドゥー・ナショナリズムの昂揚という一連の状況と相関していると主張できるであろうか。確かに、ヒンディー語紙の社主は高カーストが多く、さらにその一部はヒンドゥー・ナショナリズム勢力と密接な関わりがあることが指摘されており(Jeffrey [2002])、大衆迎合的なヒンドゥー・ナショナリズムを煽る扇動的な記事を載せる場合もあったことは否定できない。1993 年 1 月のムンバイのコミユナル暴動において Government of Maharashtra [1998: para. 1.2 (Chapter III, Volume I)]はマラーティー語新聞が極めて扇動的な記事を掲載したことが暴動の大規模化に寄与したとしている。また、2002 年 2 月のゴードラ事件におけるグジャラート語新聞の役割については Vora [2002]などは、やはり、新聞がコミユナルな感情を煽る記事を掲載し、暴動の深刻化を助長したとしている。しかし、そもそもメディアはコミユナル暴動を拡大することはあっても、その根本的原因を作り出しはしない。

以上の母語活字メディアの例は各地域に密接し局地的にコミユナリズムを増幅する例であるが、1980 年代以降のコミユナル暴動の大規模化、ヒンドゥー・ナショナリズム言説の広範囲にわたる拡散は、局地的メディアというより、より大規模なメディアが何らかの役割を果たしていたのではないかということをおぼせる。そのようなメディアとして重要と考えられているのはテレビである。インドではテレビは 1980 年代以降に急速に普及した。経済自由化というコンテクストも含めこの点について検討を行ったものとし Farmer

[1996]などがあげられるが、もっとも包括的かつ詳細な研究は Rajagopal [2001]である。

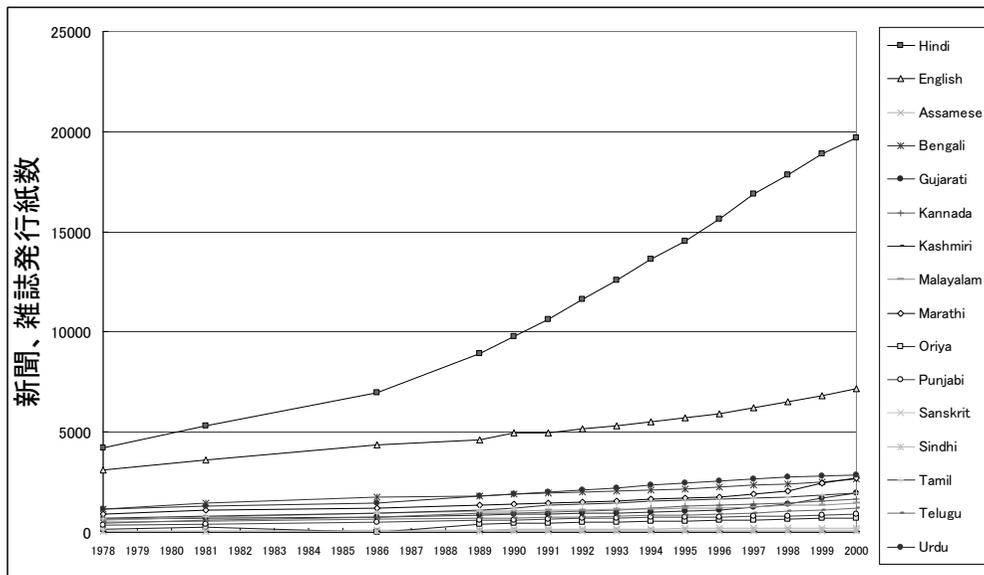
Rajagopal によれば、経済自由化は公的、私的領域を再編成していくが、その再編の過程は、社会を「一様化」しようとするヒンドゥー・ナショナリストの政治的意図とかなりの部分合致するものであったという。特に自由化と軌を一にするテレビ放送の拡張は、テレビ放送が一様に視聴者に届くという特質から、もし、ヒンドゥー・ナショナリズムのイメージがテレビを通して流されるならば、大きな影響力をもつ。そのようなイメージの中では国営放送の「ドゥールダルシャン」¹²で放送された、「ラーマーヤーナ」(1987年－1988年)と「マハーバーラタ」(1988年－1990年)が重要であった。テレビの普及時期と重なり、これらの番組は非常な人気を博し、幅広い階層の人々がヒンドゥーとして意識を共有する集合的経験を得たとする。これは英語文化に触れるエリートと母語文化によってたつ大衆との亀裂、カースト間の亀裂など多くの分裂を抱えこむインド社会、それを Rajagopal は「分裂した公衆」とよぶが、そのような社会を貫くものとなる。そのようなヒンドゥー・ナショナリズムのシンボルが公的なものとして社会に一様に流布される状況は、はからずしも RSS/BJP の意図するところと一致するのである。それは経済自由化の中であたかもヒンドゥー・ナショナリズムのシンボルが商業化され、テレビを通じてヒンドゥー大衆にまんべんなく小売りされるようなものである。この時期のテレビ放送のこのような役割がヒンドゥー・ナショナリズムの拡散に大きな貢献を果たした、とするのである。

以上の Rajagopal の主張は電子メディアとしてのテレビの特色をよくとらえたものと言えようが、多くの疑問が持ち上がるであろう。もっとも根本的な問いは、ヒンドゥトゥヴァを連想させるメッセージやシンボルが広範囲に、かつ、速やかに伝達されるということだけで、人々はよりヒンドゥー・ナショナリストになるであろうか、という点である。これは依然として証明されていない。また、同質のイメージが流布されようとも、多様な文化からなるインド社会で人々が同じような反応を示す保障は何もない。

以上のように母語新聞やテレビなどのメディアの発展は人々の政治的、文化的感性を高め、政治的意識のある種の共通の土台を用意することによってヒンドゥー・ナショナリズムの拡散に一定の意味はもつことは間違いないが、それが「ナショナリズム」の重要な要件である多様な人々の一様化、統合にプラスに働くかマイナスに働くか、に関しては確固たる答えは出ていないと言って良いであろう。

このような疑問も含めヒンドゥー・ナショナリズムに対する人々の反応が、それを企図する勢力の意図とは違い、実はかなり多様なものでありうることを確認する必要がある。この点を次に検討したい。

図2 言語別の新聞、雑誌発行数:



(出所) 次の資料より筆者作成。Ministry of Information and Broadcasting, *Press in India*, various years.

ヒンドゥー・ナショナリズムの拡散に関しては、ナショナリズムの地方化、それに対する州レベルの反応といった研究が重要である。主に各州におけるヒンドゥー・ナショナリズムの展開を分析した論文集としては Hansen and Jaffrelot (eds) [1998]がある。ヒンドゥー・ナショナリズムが一定の影響力を持つのは、ウッタル・プラデーシュ、ラージャスターン、マッドィヤ・プラ

デーシュといったいわゆるヒンディー語地域、そして、マハーラーシュトラ、グジャラートなど西部の州であるが、これらの州独自の地域史やカーストの状況に基づいて分析がなされており、単一であろうとするヒンドゥー・ナショナリズムが、実際は多様に受け入れられていることが示される。パンジャブ州においてはシク教徒の政党であるアカーリー・ダル(Akali Dal)と連合を組む BJP の戦略が分析されている。また南部州に関しては、従来は文化、社会の違いもあって少なくとも RSS、JS/BJP 流のヒンドゥー・ナショナリズムは受け入れられないであろうと考えられてきた。しかし、近年カルナータカで少なくとも選挙においては一定の支持を獲得しており、動向が注目されているが、同州の専門家の Manor によると一定以上の勢力伸張は難しいという。周知のように 1998 年、1999 年の選挙では BJP は独自の基盤が弱い州では州レベル政党と連合を組んだ結果、勝利を収めた。この論文集はそのような選挙結果につながる各州の状況が示され有益なものとなっている。

ヒンドゥー・ナショナリズムの地域的多様性という点ではマハーラーシュトラのシヴ・セナー(Shiv Sena)が重要な研究対象である。シヴ・セナーの起源は一種の「土地の子」運動で、1960 年代後半の経済的困窮の時代¹³にその起源がある。ボンベイ(現在「ムンバイ」)では商業都市として州外から流入が多く、地元住民の雇用を奪っているという認識があったが、そのような状況のなかで州外人、とりわけ南インドから流入してきた人々の排除とマハーラーシュトラ人優先を掲げて 1966 年に B. ターカレー(Bal Thackeray)によって始められた。シヴ・セナーは暴力的街頭運動を行うと共にスラム住民への援助などで下層民の支持を得る一方で、排除すべき敵として、最初は南インド人、次第にムスリムを目標とすることでホワイト・カラーの間にも支持を広げ、さらにまた、左翼・労働運動に対抗することで都市部の資本家や富裕層の支持を得た。このような経緯は初期のシヴ・セナー研究である、Katzenstein [1979]および Gupta [1982]などが示してくれる。都市部におけるシヴ・セナーの展開において重要な社会心理的要因は、部外者によって経済的に文化的に抑圧されているという「マハーラーシュトラ人」の中の感覚で

ある。

シヴ・セーナールは 1984 年に BJP と協力関係を結ぶと同時に次第にヒンドゥー・ナショナリズムの方向に接近し、影響力を拡大した。1995 年の州議会選挙では BJP と連合し勝利を収め州政権についている¹⁴。1993 年 1 月のムンバイのコミューナル暴動においてはムスリムに対する組織的攻撃を行ったとして非難されたが(Government of Maharashtra [1998: para. 1.27 (Chapter II, Volume I)]、影響力拡大においては暴力によって「敵」に対抗することで、都市部を中心とするヒンドゥー住民の支持を得た。

一般に人々のアイデンティティは日常的生活の場では流動的、重層的、競合的である。そのような多様性に富む社会に「ネーション」を導入する手取り早い方法は、コミューナルな言説、暴力などによって多様性をステレオタイプ化し単純化していくことができる。それは社会に「敵」を作り出すことになるが、それを作りだし、それと戦うものとしてシヴ・セーナールを描いたのが、Banerjee [2000]である。Banerjee はボンベイという大都市特有の社会経済的要因や会議派の統治行政能力の欠如による下層民の困窮、疎外感などシヴ・セーナールの成長、その攻撃的活動が重要な要因とするが、それだけではシヴ・セーナールの攻撃性を説明することは難しいとする。Banerjee はシヴ・セーナールは、ムスリムは攻撃的でヒンドゥーは非暴力的であるというステレオタイプ化した言説を、マハーラーシュトラの復古主義的環境のなかで再構成し、武断主義的で兵士の伝統によって裏打ちされた「男性」的同胞意識の概念を作り上げたとし、これが社会的政治的要因を背景にシヴ・セーナールの攻撃性の大きな要因となっているとする。

シヴ・セーナールがマハーラーシュトラの歴史的伝統と大都市という社会的環境から成長したことを分析したものとして Hansen [2001]がある。Hansen はシヴ・セーナールを単なる復古主義ではとうていなくて、それを近代化と民主主義の中からでてきた運動と考える。彼によるとシヴ・セーナールは下層民のエネルギーを利用したが支持の中核は中産階級であり、大都市の混沌から暴力的な運動を通じてマハーラーシュトラ人というアイデンティティを拡散し

ていった。Hansen の分析で特徴的なのは大都市ボンベイの社会的特色をよくとらえていることである。例えば、「ダーダー」(“dada”、“親分”)といわれる地域の有力者、それは時にはギャングでもあるが、それを分析の中に位置づけていることである。1993年3月のボンベイの一連の爆弾テロの主犯格と見られるダ우드・イブラヒム(Dawood Ibrahim)は典型的なダーダーである。またシヴ・セナーによってムスリムの「ナマーズ」(集団礼拝)に対抗するために組織された「大いなる祈り」(“maha aartis”)といわれる寺院の前など街頭でのヒンドゥーによる集団的祈りが、ヒンドゥーの統合と力の意識を昂揚させるものとして重要な役割を果たしたことを分析した。重要な点は警察など当局はシヴ・セナーの運動を制することが暴動につながることを恐れて、出来るだけ介入しないようにしていたという点である。国家が、すなわち、この場合は州政府であるが、治安や暴力の装置の唯一の独占者となっていない大都市ボンベイの状況である。

Hansen の研究は都市という状況の中でシヴ・セナーが成長してきた様相を描いたが、ヒンドゥーの社会、経済を積極的に改革しようとする側面、つまり改革運動としての側面があるとは積極的には評価していない。確かにスラム開発計画などは行ってはいるが、しかし、全体的改革のフレームワークは極めて曖昧である。また Hansen 自身も評価が定まらないいくつかの点があるように思われる。例えば Hansen の研究によると 1980 年代中頃に BJP と密接な関係を持ってからシヴ・セナーは「ヒンドウトゥヴァ」に強くコミットしていくように読める。確かに 1980 年代中頃以降は BJP と組んでヒンドゥー・ナショナリズムの側に立つが、それによってシヴ・セナーの運動はより大きなヒンドゥー・ナショナリズムに組み込まれたとすることができるであろうか。ナショナリズムが成長する過程では地方の小伝統や小政治文化、そしてローカルな政治は何らかの意味で「主流」に統合されると考えられるがシヴ・セナーの運動もそうなるであろうか。この疑問に Hansen は明確な答えをだしているようには思われない。マハーラーシュトラ人の利益ということがシヴ・セナーの第一の存在意義とするとそれは「主流」のヒンドゥ

一・ナショナリズムと場合によっては衝突する可能性があるのではないかと
思われる。

いままでの議論でヒンドゥー・ナショナリズムと社会の関係を考えると、
それを突き動かすものとして暴力、暴動が重要になってくる。様々なコミュニ
ナルな言説も亀裂を作り出し、多数派を少数派に対置させることにより多数
派がまとまる効果があるであろうが、コミユナル暴動の効果はそれを凌駕す
る。最後にこの点を検討したい。

第4節 ヒンドゥー・ナショナリズムの展開とコミユナル暴動

コミユナル暴動はコミユナリズム、あるいは、ヒンドゥー・ナショナリズム
の異質なものを排除するという側面の極端な発露である。ヒンドゥー・ナ
ショナリズムの展開とコミユナル暴動は極めて密接に関係しており、今まで
取り上げた全ての研究はコミユナル暴動を取り上げているが、ここではコミ
ユナル暴動を中心的に扱っているもののみ取り上げてみたい。

1980年代以降のコミユナル暴動の拡大に関しては、Rajgopal [1987]が政府
統計データを使ってその概要を明らかにしているが、これが先駆的な研究と
なろう。また後に参照する A.A. Engineer はコミユナル暴動を主要テーマとし
て長年にわたり取り上げている。コミユナル暴動はヒンドゥー対ムスリムな
どの宗教的少数派の間の亀裂を決定的にし、その上で少数派に対抗してヒン
ドゥーの「統合」を進める効果がある。アヨーディヤー事件を中心に宗教と
コミユナリズムの関係を分析した Bidwai et al. (eds) [1996]の論文集で暴動が
多く取り上げられているように、近年のヒンドゥー・ナショナリズムの社会
への浸透はコミユナル暴動の頻発化を考慮せずしては理解できない。

Nandy et al. [1997]の研究によれば、ヒンドゥー・ナショナリズムの浸透と
コミユナル暴動の絡み合いは1992年12月6日のアヨーディヤー事件に至る
過程の重要な側面であった。彼らは寺院建立の勤行を行ういわゆる「カール
セーヴァー」の動き、ヒンドゥー住民や警察の間での「カールセーヴァー」

に対する共感の広がり、そしてアヨーディヤー事件とその後の暴動の展開、とりわけ、グジャラートのアーメダバード、ラージャスターンのジャイプルの暴動の事例などを分析し、ヒンドゥーの「ナショナリティ」＝ヒンドゥーイズムの「上位文化」(High culture)を形成するためにアヨーディヤーでラーム寺院を建立するというシンボルの運動がいかに暴力的なプロセスと絡みあって拡大したか示した。

アヨーディヤーのパーブル・モスク破壊事件は RSS, BJP, VHP, BD などヒンドゥー・ナショナリズム勢力による意図的計画によって起こった事件である、ということについてほとんど疑いはない。彼らによるとそもそも「ラーム神」がこれらの組織によって運動のシンボルとして取り上げられたのは、まったくの政治的戦術からであったという。例えば、著者らによると、マホトマ・ガンディーが RSS の事務所に行ったとき RSS はラーム神を「女々しい」もので RSS の運動には適さないといったと言われる(Nandy et al. [1997: 99])が、現代の RSS 勢力が打ち出すラーム神をシンボルとするヒンドゥー・ナショナリズムは「雄々しさ」や「男性性」などによって特徴付けられている。つまり都合のよいイメージに置き換えられてしまっている。このことが象徴するように、一連の事件の展開は与えられた政治社会環境の下で政治的目的を効率よく達成するために意図的に仕組まれたものである。また、彼らによると事件をきっかけにして起こった暴動にもこれらの組織の関与があったという。

コミユナル暴動がなぜ起こるかという点に関しては既に取り上げた文献でも、歴史的、社会的観点から分析がなされている。1992 年のアヨーディヤー事件に至る歴史的経緯、なぜアーメダバード、メーラットなど特定の都市で暴動が頻発するのに他の都市や農村ではなかなか起きないかという社会的研究、これらについて一定の分析が行われている。しかし、近年のコミユナル暴動がより広い範囲に広がり、かつ、広範な地域で連動するようになっていることを考えると、コミユナル暴動の一般論を考える必要が出てくるであろう。近年の分析で重要なのは Varshney [2002]である。

Varshney [2002]はなぜある所ではコミユナルな火花(スパーク)が飛んでも暴動に発展しないのに、なぜ別の場合は大規模なコミユナル暴動に発展するのか、という問いをたて、それに対する既存研究の仮説を「本質仮説」(essentialism)、「操作仮説」(instrumentalism)、「構築仮説」(constructivism)、「制度仮説」(institutionalism)の4つにまとめた。しかし彼によるとこれらは、コミユナル暴動が起こるかどうかいずれも部分的には説明できるが、十分なものではない、という。Varshney は Wilkinson と共同で作成した宗派間暴動のデータセットから暴動が主に都市部の現象であることを確認した。その上で特徴的な都市をペアで比較検討することで、宗派間暴動の原因を探った。その結果、彼が目にするのは、各宗派内部または各宗派間の関係であった。その2つの組み合わせによってコミユナル暴動となる場合もあり、そうならない場合もあるという。Varshney が主張するのは、各宗派内部の凝集性が高く、逆に宗派間の凝集性、または、つながりが薄いことが宗派間の亀裂、そして暴動が生じやすくなる大きな要因である(Varshney [2002: 281])、という点である。例えば社会的状況としては都市部の方が農村部よりも暴動が起きやすい。もっとも Varshney は、例えば選挙政治など政治の競合などコミユナルな「火花」がどうして起こるか、それ自体には大きな分析の比重を置いていない。

ヒンドゥーとムスリムの間のコミユナル暴動を引き起こす「スパーク」が起こるもっとも大きな要因は政治、特に選挙政治であろう。選挙と、コミユナル暴動の関係を体系的、定量的に探ったものは少ない。少ない中で重要なものは Wilkinson [2004]であろう。同氏の研究は先に述べた Varshney との共同で作成された宗派間暴動のデータセットを元に統計的に宗派間暴動の原因を探ったものである。分析によると、コミユナル暴動には選挙が影響を与えており、選挙が近づくとつれ暴動は起こりやすくなるという。しかし、政党が分裂し少数派の支持を得ようと争っている州、特に与党がムスリムの支持を当てにしているような場合は、暴動はおきにくく、特に共産党の勢力が強い州などではそうであるという。反対に2大政党制に近く、かつ与党がムス

リムの支持を期待していないような州では 2002 年のグジャラートのように暴動の大規模化が起こりやすい、という(Wilkinson [2004: Chapter 5])。

この仮説に関しては P. Brass からの強い批判がある。Brass [2003]は主にウッタル・プラデーシュ州の事例などを検討して Wilkinson の考え方を批判し、因果関係はむしろコミユナル暴動が選挙における政党間の競合、支持率に影響を与える方向に作用する、とした。Brass はコミユナル暴動が非常に複雑な過程で起きているが故に統計的分析で解釈するような方法論ではダイナミズムをとらえがたいとする。Brass は選挙がコミユナル暴動を誘発するとする因果関係の方向性を完全に否定したわけではないが、逆の方が実態にあうことをフィールドサーベイに基づくミクロな研究から示した。Brass はコミユナル暴動は自然発生的に起こるのではなく、それによって利益を受けるものが人為的に生み出すもの、つまり、極めて政治的なものであるとし、それを「制度化された暴動システム」(institutionalized riot systems)と名付けている。逆にいえば、そのような人為的なものとするならばコミユナル暴動の発生および拡大はもし、政府が厳に抑制する政治的意志をもてば抑止できるものとする。

この Brass の仮説は丹念なミクロなフィールド調査に裏打ちされているだけあって、大規模なコミユナル暴動に関しては非常に説得力を持つと言える。1992 年のアヨーディヤー事件とそれにつづくコミユナル暴動、2002 年 2 月のグジャラート州ゴードラの列車火災事件をきっかけとして広がったコミユナル暴動はいずれも「制度化された暴動システム」というにふさわしいと考えられる。特に後者の場合、Engineer (ed.) [2003]によればグジャラート BJP 州政府の不作為、または、関与は明らかであると思われる。

おわりにかえて

本稿では 1980 年代以降のヒन्दゥー・ナショナリズム研究の主な研究成果を筆者の視点から整理したものである。現代史においてサング・パリヴァール=RSS/BJP/VHP/BD などが進めている運動は、我々から見た場合、その内

容が外見的にどんなに特殊に見えようとも、「ナショナリズム」の一般的定義に沿うものであるとあってよいと思われる。

今までの研究から「ヒンドゥー・ナショナリズム」が「全てを包摂する」べく広がっていくためには今なお大きなハードルがあることは明らかである。その一つは、言説レベル、社会レベルの問題で、地方的土着的な文化伝統を特殊サング・パリヴァール流の「ヒンドゥー・ナショナリズム」の言説に統合できるかどうか、という問題である。サング・パリヴァール流の「ヒンドゥー・ナショナリズム」の起源にはブラーマンの考えと都市部の中産階級的感觉の混合物があり、それゆえに低カースト層をスムーズに巻き込むことは難しい側面があると思われる。もう一つのハードルはコミユナル暴動である。前節で指摘したようにコミユナル暴動はヒンドゥーをナショナリズムに結集させる有力な手段である。そのよい例がグジャラート州で、暴動の頻発する同州ではヒンドゥーとムスリムの社会的亀裂は決定的なものとなってしまった。またシヴ・セナーの成長においては暴力が重要な要因であった。しかし、インドの民主主義体制を前提に活動するものとする、BJP やシヴ・セナーがコミユナル暴動を無制限に続けていくことはできない。

従って「ヒンドゥー・ナショナリズム」はヒンドゥー全てを包摂するようになるのは極めて難しいといえよう。アヨーディヤーの位置するウッタール・プラデーシュ州々議会選挙が 2007 年 5 月に行われたが、BJP はすでに 1990 年代の勢いはない。議席の過半数を得て政権を樹立したのは指定カーストの支持を中核とするが、その他ブラーマン、OBCs、そしてムスリムも含めた広い階層の支持をみつめた「多数者社会党」(Bahujan Samaj Party)であった。このような展開はウッタール・プラデーシュ州の社会運動の歴史、カースト構成、ムスリムの状況など特有な条件によって現出したもので、他の州にも広がるかどうかはわからないが、この例は「ヒンドゥー・ナショナリズム」が運動として一つの行き着く先であろう。

インドは世界で最も複雑、複合的な社会であり、政治的にはそのような複雑さの共存を許すべく連邦制度と様々な段階で選挙制度をとっている。このよ

うな社会で「全てを包摂する」ナショナリズムがもし構築されたとしたら、それはまさに歴史的な事件である。裏返せば、その実現は非常に難しいものといえよう。

－ 注 －

¹ 例えば以下を参照。サルカール [1993(1983): 583-598].

² 例えば、1956年の州の再編成の主要基準は、「言語」に加え、文化、州の行政的効率性、財政的自律性、地理的連続性などであったが、宗教人口の分布状況などは基準としては採用されていなかった。宗教アイデンティティを持ち出すことによるコミュニズムの発現の可能性をあらかじめ封じるためである。Government of India [1955: 253-256].

³ 近代史において"Hindutva"が最初に明確に唱えられたのは Hindu Mahasabha (1914年結成)の V.D. Savarkar 総裁が1923年に出したパンフレット、*Hindutva - Who Is a Hindu?*においてである。その考え方は1925年に結成された RSS に受け継がれる。

⁴ 指定カーストの不可触民差別や指定部族の僻地の部族民といった条件にはあてはまらないが、しかし、社会的・教育的に指定カーストおよび指定部族と同様に後進的な社会層を指す

⁵ この「サング・パリヴァール」には、RSSの幹部がそれら組織の要所にいとされる。

⁶ BJPは1998年の総選挙で勝利し、その他の有力な州政党の支持を取り付けてNDAを作り上げ連合政権を樹立した。しかし、州政党の離反から政権は崩壊し、1999年に中間選挙となった。BJPの A. B. Vajpayee を首班とする NDA 政権は連邦下院で過半数を安定的に上回る議席を確保することができたため5年の任期を全うできた。

⁷ この点について説得力のある議論を展開しているのが Kohli [1990]である。

⁸ 当時から“Mandal”、すなわち OBCs への留保制度を適応することに関する政治運動、と“Mandir”、すなわちアヨーディヤーのパーブル・モスクの地にラーム神の寺院を建立しヒन्दゥー・ナショナリズムを昂揚しようとする政治運動、という形で対置された。

⁹ この「第3章」の初出は、関根 [1995]である。

¹⁰ 「指定カースト(Scheduled Castes)」とは、憲法第341条に基づき指定されるカースト。指定されるのは主に歴史的に差別されてきた旧不可触民である。「指定部族(Scheduled Tribes)」は憲法第342条に基づき指定される後進的な部族民。指定カースト、指定部族は選挙、行政への採用などにおいて優遇措置を受けることができることが憲法上認められている。

¹¹ ウッタル・プラデーシュ州の例として例えば Narayan [2006]などを参照。

¹² “Doordarsham”. 「遠方を見ること」、「先見」などと訳せる。

¹³ “Shiv Sena”はシヴァージーの軍団という意味。旧ボンベイ州は、1960年にマハララシュトラ州とグジャラート州に分離する。その過程で起こった地域主義も、シヴ・セナーが出現する文脈となっている。

¹⁴ 1995年の州議会選挙の分析として例えば以下を参照。Vora [1996], Palshikar [1996]

[参考文献]

日本語文献

- アンダーソン、ベネディクト(白石隆・白石さや訳) [1987(1983)] 『想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』リプロポート 1987 年(Benedict Anderson [1983] *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, New York: Verso.).
- ゲルナー、アーネスト [2000(1983)](加藤節訳) 『民族とナショナリズム』岩波書店 (Ernest Gellner, [1983] *Nations and Nationalism*, Oxford: Blackwell).
- 木村雅昭 [1996] 『インド現代政治 その光と影』世界思想社.
- 小谷汪之 [1993] 『これからの世界史 5 ラーム神話と牝牛: ヒンドゥー復古主義とイスラム』平凡社.
- 近藤則夫 [1998] 「90 年代のインドの政党政治と社会集団: ヒンドゥー主義の衝撃と政党システムの分化」近藤則夫編『1990 年代インドの政治経済の展開』アジア経済研究所.
- [2007] 「第 1 章 インドにおける選挙研究(Election Studies in India)」近藤則夫編『アジア開発途上諸国における選挙と民主主義』アジア経済研究所.
- 近藤光博 [1998] 「ヒンドゥー・ナショナリズムの遍在 — RSS と BJP —」『海外事情』第 46 巻第 7・8 号(7 月).
- [2002] 「インド政治文化の展開」堀本武功・広瀬崇子編『現代南アジア 3 民主主義へのとりくみ』東京大学出版会.
- 佐藤宏 [2000] 「コミュニナリズムへの視点 — アヨーディヤー事件とインド政治研究」『アジア経済』第 41 巻第 10, 11 合併号 2000 年 10—11 月.
- サルカール、スミット [1993(1983)] 『新しいインド近代史—下からの歴史の試み II』研文出版(Sumit Sarkar [1983] *Modern India - 1885-1947*, Madras: Macmillan.

- スミス、アントニー・D. (高柳先男訳) [1998(1991)] 『ナショナリズムの生命力』 晶文社 1998年(Anthony D. Smith [1991] *National Identity*, London: Penguin).
- 関根康正 [1995] 「暴力・政治・宗教—マドラス市の祭礼ヴィナーヤガ・チャトゥルティーの現在からの考察」 杉本良男編『南山大学人類学研究所叢書V 宗教・民族・伝統—イデオロギー的考察』 南山大学人類学研究所.
- [1998] 「南アジアの開発と国民統合の現実—インドにおける経済自由化とヒンドゥー・ナショナリズムの台頭 —」 『岩波講座 開発と文化 4 開発と民族問題』 岩波書店.
- [2006] 『宗教紛争と差別の宗教学 — 現代インドで<周辺>を<境界>に読み替える』 世界思想社.
- 内藤雅雄 [1998] 「インドの民主主義とヒンドゥー原理主義」 古賀正則・内藤雅雄・中村平治編『現代インドの展望』 岩波書店.
- 長崎暢子 [1994] 「政教分離主義と基層文化・ヒンドゥーイズム」 蓮實重彦・山内昌之編『いま、なぜ民族か』 東京大学出版会.
- [2004] 『インド 国境を越えるナショナリズム』 岩波書店.
- 中島岳志 [2005] 『ナショナリズムと宗教 現代インドのヒンドゥー・ナショナリズム運動』 春風社.
- 広瀬崇子 [1994] 「インドにおけるヒンドゥー・ナショナリズムの台頭 — インド人民党を中心に—」 『アジア経済』 第35巻第3号(3月).
- 堀本武功 [1996] 「ヒンドゥー主義の逆襲にさらされたインド政治」 『世界』 第624号(7月).

外国語文献

- Andersen, Walter K. and Shridhar D. Damle [1987] *The Brotherhood in Saffron - The Rashtriya Swayamsevak Sangh and Hindu Revivalism*, New Delhi: Vistaar.
- Banerjee, Sikata [2000] *Warriors in Politics: Hindu Nationalism, Violence, and the Shiv Sena in India*, Boulder: Westview.

- Basu, Tapan, Pradip Datta, Sumit Sarkar, Tanika Sarkar, and Sambuddha Sen [1993] *Khaki Shorts and Saffron Flags: A Critique of the Hindu Right*, New Delhi: Orient Longman.
- Beahm, Donald L. [2002] *Conceptions of and Corrections to Majoritarian Tyranny*, Lanham: Lexington Books.
- Bidwai, Praful, Harbans Mukhia, Achin Vanaik (eds) [1996] *Religion, Religiosity and Communalism*, New Delhi: Manohar.
- Brass, Paul R. [2003], *The Production of Hindu-Muslim Violence in Contemporary India*, New Delhi: Oxford University Press.
- Davis, Richard H. [1996] “The Iconography of Rama's Chariot”, in Ludden, David [1996] *Contesting the Nation - Religion, Community, and the Politics of Democracy in India*, Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Engineer, Asghar Ali (ed.) [2003] *The Gujarat Carnage*, Hyderabad: Orient Longman.
- Engineer, Asghar Ali [2004] *Communal Riots After Independence: A Comprehensive Account*, Mumbai: Centre for Study of Society and Secularism.
- Farmer, Victoria L. [1996] “Mass Media: Images, Mobilization, and Communalism”, in Ludden, David [1996] *Contesting the Nation - Religion, Community, and the Politics of Democracy in India*, Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Ghosh, Partha S. [1999] *BJP and the Evolution of Hindu Nationalism - From Periphery to Centre*, New Delhi: Manohar.
- Government of India [1955] *Report of the States Reorganisation Commission*, New Delhi: Government of India Press.
- Government of Maharashtra [1998] *Report of the Srikrishna Commission: Appointed for Inquiry into the Riots at Mumbai during December 1992-January 1993 and the March 12, 1993 Bomb Blasts*, in Anand, Javed [1998] *Damning Verdict*, Mumbai: Sabrang Communications & Publishing.
- Gupta, Dipankar [1982] *Nativism in A Metropolis - The Shiv Sena in Bombay*, New Delhi: Manohar.

- Hansen, Thomas Blom [1999] *The Saffron Wave: Democracy and Hindu Nationalism in Modern India*, New Delhi: Oxford University Press.
- Hansen, Thomas Blom [2001] *Violence in Urban India: Identity Politics, 'Mumbai', and the Postcolonial City*, Delhi: Permanent Black.
- Hansen, Thomas Blom and Christophe Jaffrelot (eds) [1998] *The BJP and the Compulsions of Politics in India*, Delhi: Oxford University Press.
- Jaffrelot, Christophe [1996] *The Hindu Nationalist Movement and Indian Politics 1925 to the 1990s*, New Delhi: Penguin Books.
- Jeffrey, Robin [1993], "Indian-Language Newspapers and Why They Grow," *Economic and Political Weekly*, September 18.
- Jeffrey, Robin [2002] "Grand Canyon, Shaky Bridge: Media Revolution and the Rise of 'Hindu' Politics," *South Asia – Journal of South Asia Studies*, 25(3), December.
- Katzenstein, Mary [1979] *Ethnicity and Equality: The Shiv Sena Party and Preferential Policies in Bombay*. Ithaca: Cornell University Press.
- Kohli, Atul [1990] *Democracy and discontent: India's Growing Crisis of Governability*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Lok Sabha [2004] Starred Question No. 294, dated 21.12.2004.
- Lok Sabha [2005] Unstarred Question No. 239, dated 26.07.2005.
- Ludden, David [1996] *Contesting the Nation - Religion, Community, and the Politics of Democracy in India*, Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Malik, Yogendra K. and V. B. Singh [1994] *Hindu Nationalists in India - The Rise of the Bharatiya Janata Party*, Boulder: Westview Press.
- Ministry of Home Affairs (Govt. of India) [2007], *Status Paper on Internal Security Situation: As on March 31, 2007* ([http://mha.gov.in/internal%20security/ISS\(E\)-050208.pdf](http://mha.gov.in/internal%20security/ISS(E)-050208.pdf)).
- Nandy, Ashis, Shikha Trivedy, Shail Mayaram, and Achyut Yagnik [1997] *Creating A Nationality: The Ramjanmabhumi Movement and Fear of the Self*, Delhi: Oxford University Press.
- Narayan, Badri [2006] "Memories, Saffronising Statues and Constructing Communal Politics",

- Economic and Political Weekly*, November 11.
- Panikkar, K.N. (ed.) [1991] *Communalism in India - History, Politics and Culture*, New Delhi: Manohar.
- Palshikar, Suhas [1996] “Maharashtra - II: Capturing the Moment of Realignment”, *Economic and Political Weekly*, January 13-20.
- Rajagopal, Arvind [2001] *Politics After Television - Religious Nationalism and the Reshaping of the Indian Public*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Rajgopal, P. R. [1987] *Communal Violence in India*, New Delhi: Uppal.
- Rajya Sabha [2000] Starred Question No. 52, dated 26.07.2000.
- Savarkar, Vinayak Damodar [1989] *Hindutva: Who Is A Hindu?*, New Delhi: Bharti Sahitya Sadan, (原本は 1923 年出版).
- Varshney, Ashutosh [2002] *Ethnic Conflict and Civic Life - Hindus and Muslims in India*, New Delhi: Oxford University Press.
- Vora, Batuk [2002] “Gujarati Print Media: Culprit Second to None”, *Mainstream*, April 9.
- Vora, Rajendra [1996] “Maharashtra - I: Shift of Power from Rural to Urban Sector”, *Economic and Political Weekly*, January 13-20.
- Wilkinson, Steven I. [2004] *Votes and Violence: Electoral Competition and Communal Riots in India*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Wilkinson, Steven I. (ed.) [2005] *Religious Politics and Communal Violence*, New Delhi: Oxford University Press.
- Yadav, Yogendra [2004] “The Elusive Mandate of 2004”, *Economic and Political Weekly*, December 18.